論　文

『伊勢物語』に表れた絶望・悲観と倫理観

古屋　明子（大東文化大学文学部）

Despair,Pessimism and Ethics in The Tale of Ise

Akiko FURUYA

一　はじめに

日本の古代人は、何を恐れ、それら恐怖の対象に対してどのような思いを抱いていたのであろうか。また、それらの思いは、彼らの倫理観とどのように関係してくるのだろうか。これらを『伊勢物語』という物語世界の中で追究していく。

上代の『古事記』では「カシコシ（恐・恐之・畏・加志古志）」に日の神アマテラスへの畏怖が、「カシコム・カシコマル（畏）」「オソル（惶）」「オヅ（懼）」に性情（嫉妬や凶暴性）への恐怖がそれぞれ表され、「罪」の内容は『延喜式』の天津罪や国津罪にあたるものや天皇への無礼な行為である[(1)]。また、『日本書紀』では「威・可畏・伽之古倶／箇辞古耆」に天皇や神の化身への畏怖・恐怖が、「懼・怖・惶」に天への畏怖や性情（残虐性）への恐怖がそれぞれ表され、「罪」の内容は天皇（朝廷）への侵犯行為であり、天皇の権威や天、性情というものが倫理観の基本として描かれ『古事記』よりも儒教的倫理観を明確に打ち出そうとしている[(2)]。一方、中古の『竹取物語』になると、畏怖・恐怖の対象は天皇や世間に移り、「かしこし」には天皇や高貴な身分の者に従うという常識的な認識が描かれ、それに代わって「はづかし」や「恥」に世間を恐れ「人聞き」を重視するという認識が強調されるようになり、天皇の権威と「恥」を知り「人笑へ」にならないことをよしとする倫理観が描かれるようになる[(3)]。

そこで、『伊勢物語』では、天皇への畏怖、世間や人間の性情に対する恐怖はどのように描かれているのだろうか。管見では恐怖に直接つながるような「おそろし」等の語の用例が見当たらず、「かしこし」にはもはや畏怖の意味はなく程度が甚だしいという意味で愛情や感慨を形容している。そこで、第一三段に多出する「はづかし」「つらし」「たへがたし」「くるし」という心情を表す語に着目し、それぞれの心情を抱く主体とその対象、その内容を考察し、そこに表れた絶望や悲観を通して倫理観を明らかにしていく。

二　鄙の男の思い（一三段）

これから述べる一三段（後の六二段も同様）は、名文とされる優れた章段を描き出す伊勢物語絵にも取り上げられず[4]、段中の歌が『万葉集』や三代集、『古今六帖』等の歌集にも載っていない[5]。確かに「武蔵鐙」という無骨な感じの語を見るとあまり洗練されているとは言えない歌であるようにも思われる。しかし、「恥づかし」を初めとして男女関係の中での絶望や悲観を表した苦しい胸中を表す形容詞が多く使われているのでそれらを中心に、『伊勢物語』全体においてもそれらの形容詞に着目した。

1　むかし、武蔵なる男、京なる女のもとに、「聞ゆれば恥づかし、聞えねば苦し」と書きて、うはがきに、「むさしあぶみ」と書きて、おこせてのち、音もせずなりにければ、京より、女、

武蔵鐙さすがにかけて頼むには問はぬもつらし問ふもうるさし

とあるを見てなむ、たへがたき心地しける。

問へばいふ問はねば恨む武蔵鐙かかるをりにや人は死ぬらむ（『伊勢物語』一三段一二五～一二六頁）

1は武蔵の国に住む男と京にいる女の話である。男の心情を表す語に着目してみると、「恥づかし」は女に武蔵の国の愛人のことを打ち明ける気のとがめを表し、「苦し」は打ち明けない場合の女を裏切る心の痛みを表す。男の手紙の上書きの「むさしあぶみ」は、『古今六帖』の歌[6]を踏まえて、武蔵の鐙（馬具）と鄙で女と逢う身を掛け（新旧全集・集成）、「そなたを愛する身でありながら東国の女ともわりない仲になった、と告白した」（新大系）ことを表し、その後男は音信不通になる。応える女の歌では鐙に付いている金具「さすが」と諦めてもやはりという「さすがに」を掛けて男の心を取り戻したいかのように諦めきれない思いを訴えるとともに、「つらし」と男の「音もせず」という仕打ちの堪え難さを詠む。歌で女の愛情を改めて知った男も「たへがたき」と辛く思い、返す歌で「死ぬ」ほど思い惑う気持ちを詠む。「たへがたし」には女の熱情に動かされた男の真情が表されていると言える。

この「武蔵鐙」であるが、古註釈書の白眉[7]と言われる冷泉家古注の集大成『冷泉家流伊勢物語抄[8]』（古注、鎌倉前期成立か）では、日本記の称徳天皇の御代に武蔵国に下った橘の安喜（あき）丸が帰京の際「武蔵鐙」を形見として女に残し女は「武蔵鐙」を見ては男を恋しく思ったという話を挙げている。管見では『続日本紀』称徳天皇紀にこの話を見つけることはできなかったが、「是より忘もやらぬ恋には、むさしあぶみを哥にも読（ヨム）也」とあるので、一三段の「武蔵鐙」を恋しく思う気持ちを表す物として解釈し、その後の『古今和歌六帖』等にも「さすがに」「踏み」「文」などの枕詞として（『角川古語大辞典』）詠まれているので、鎌倉前期の冷泉家の人々は「武蔵鐙」を無骨な語であるとは受け取らなかったのかもしれない。

そこで男女の贈答に着目すると、鄙の馬具ではあるが恋しく思う気持ちを表す「武蔵鐙」を中心語にしながら、「聞ゆれば恥づかし、聞えねば苦し」「問はぬもつらし問ふもうるさし」「問へばいふ問はねば恨む」という対句的な繰り返しを経て、「死ぬらむ」という現在推量型の男の歌で終わっ

ている。この一三段には、鄙人となってしまった男の内面に残る都人の「みやび[9]」的一面、すなわち、現在都の女への愛情に惑乱する思い、揺れ動く心が死ぬかと思うほどの絶望として描かれている。

ところで、「恥」とは、他人との持続的関係における劣等感や自省の念、欠陥・失敗・不名誉など（『王朝語辞典』東京大学出版会）を指すが、この武蔵の男は京の女に対して武蔵の愛人のことを打ち明ける心苦しさを「はづかし」と言っている。この「はづかし」について、渡辺実氏は「倫理的な羞恥」ではなく「妻を持つまでに武蔵に住みついた自分を、もはや都びとではなくなってしまったと恥じる[10]」といい、一方、山本登朗氏は「再び逢うことを断念したはずの京の女性に、それでもなお抑えきれない恋の思いゆえに、手紙を送らずにはおれなかった」という「おもなき」ふるまいや恋情に対する恥じらいである[11]という。筆者は、女に対しては気のとがめを表しながら、手紙の上書きや歌に「武蔵鐙」という恋しさを表す語を用いるものの、武蔵に愛人をもつほど住み着いて鄙人になってしまった男の都人の女に対する劣等感が土台にあるがゆえの心苦しさであると考える。それでは、鄙人になってしまった女の方はどのような感情を抱いているのであろうか。

三　鄙の女の思い（六〇段・六二段）

2　むかし、男ありけり。宮仕へいそがしく、心もまめならざりけるほどの家刀自、まめに思はむといふ人につきて、人の国へいにけり。この男、宇佐の使にていきけるに、ある国の祇承の官人の妻にてなむあると聞きて、「女あるじにかはらけとらせよ。さらずは飲まじ」といひければ、かはらけとりていだしたりけるに、さかななりける橘をとりて、

　さつき待つ花橘の香をかげばむかしの人の袖の香ぞする

といひけるにぞ思ひいでて、尼になりて山に入りてぞありける。（『伊勢物語』六〇段　一六二～一六三頁）

3　昔、年ごろ訪れざりける女、心かしこくやあらざりけむ、はかなき人の言につきて、人の国なりける人につかはれて、もと見し人の前にいで来て、もの食はせなどしけり。夜さり、「このありつる人たまへ」とあるじにいひければ、おこせたりけり。男、「われをばしらずや」とて、

　いにしへのにほひはいづら桜花こけるからともなりにけるかな

といふを、いと<u>はづかし</u>と思ひて、いらへもせでゐたるを、「などいらへもせぬ」といへば、「涙のこぼるるに目も見えず、ものもいはれず」といふ。

　これやこのわれにあふみをのがれつつ年月経れどまさりがほなき

といひて、衣ぬぎてとらせけれど、捨てて逃げにけり。いづちいぬらむともしらず。（『伊勢物語』六二段　一六三～一六四頁）

3の「はづかし」は女が元夫の男に対して零落した我が身を見られたみっともなさ、ひけめを表している。一三段の男は鄙に長く住んで恋人をつくり、六二段の女も鄙に住んだあげく給仕女となり、つまり、両者とも零落した自分自身に劣等感をもっていて、都人の元恋人が立派すぎて鄙人の

自分がみっともなくてみじめで気後れすることを「はづかし」と言っている。2 では「はづかし」という語は出てこないが、地方官の妻となった女も高貴な元夫に対して恥を感じて出家したと思われる。これら「心浅き女型」と言われる二つの段と似たような話が、『漢書』巻六十四上に朱買臣（しゅばいしん）の「買妻恥樵」、また、『蒙求』にも「売妻恥醮」それぞれの故事として載っている。貧しい朱買臣は妻を引き留めることができず離縁を承諾したが、数年後に会稽郡の太守となり元妻とその夫を食事に招待するものの、その一ヶ月後元妻は自死する。『伊勢物語』の女たちは出家と出奔であるが、後に述べる『今昔物語集』の女は恥ずかしさに堪えられずに息絶える。森三樹三郎氏によると、儒教における恥の観念は道徳や礼儀によって養われる内面的な倫理意識である[12] という。そうであるならば朱買臣の元妻は自身の浅慮を倫理的に許せなくて一ヶ月間思い悩んだあげく自死したのかもしれない。一方、『伊勢物語』六〇段の女は現世を離脱したいと思ったのかもしれないし仏教に救いを求めたのかもしれない。六二段の女は恥を見せた男たちとの縁を全て断ち切りたくて出奔したのかもしれない。『今昔物語集』の女は再会後に何度も逢瀬があったせいもあるのか、生き恥をさらすくらいなら死んでしまいたいと心から強く願ったのかもしれない。生死の違いは大きいとは思われるが、朱買臣の元妻が理性的に思い悩んだ期間があるのに比べて、『伊勢物語』や『今昔物語集』の女たちは恥という最悪の感情をすぐに行動に表しているように描かれている。後者の方が男女関係の中でこれ以上いたたまれない恥の感情が強烈に響いてくる。そこで、『伊勢物語』に描かれた男女の関係、特にそれぞれ鄙に下った女の絶望や悲観に注目する。

六〇段の男の歌は、古歌を男の詠作としたもののようであるが、酒の肴として出された橘の実より花橘の香りに昔の女の袖にたきしめた香の香りを懐かしんだ歌、すなわち、女との逢瀬を思い出す歌であり、『古今和歌集』や『古今六帖』等にも挙げられている[13]。糸井久氏によると、六〇段では朱買臣伝で重要な役割をもった妻の人生全体が和風に物語化され、「男」の家刀自として暮らした日々以後の長い女の人生の時間と歌が結びついている[14] という。一読者としては「まめ」なる新しい夫とともに鄙に下った女に同情してしまうが、女は男の都人らしい「みやび」な言動にすぐに「思い出で」自身の行いを悔い出家してしまう。この最後の一行、急展開する女の行動の原動力となっているのが男の歌である。男はただ懐かしくてわざわざ女を呼び寄せ詠みかけたのだと思われるが、その一瞬で女は自身の価値観や判断が間違っていたこと、すなわち、鄙人の「まめ」より都人の「みやび」の方が格段に上であるという認識に至る。その後の出家は鄙での暮らしの全否定、絶望感につながるであろう。男の優美さを一瞬で印象づける歌、都での二人の暮らしを一瞬で思い出させる歌として、この古歌が選ばれているということは言えよう。

六二段の男の歌は、一首目は女の容色の衰えを嘆く歌、二首目は衝撃で返歌もできない女のぱっとしない様子を非難する歌である。この段は、『今昔物語集』巻第三十中務太輔娘成近江群司婢（なかつかさのたいふのむすめあふみのぐんじのひとなる）語第四（ことだいし）との関連がいわれている。中務太輔の娘が両親の死去で経済的に困窮し夫の兵衛佐（ひょうえのすけ）と泣く泣く別れるが、尼の勧めで近江の郡司の子である男に連れられて下るもののその妻に責められ郡司の使用人となる。ある時新任の国司を迎えて給仕等をするが国司が元の夫であることが分かり、女はそのまま息絶えてしまう。その後語り手が「かわいそうなことだ。女が昔の夫と気づくや自身の宿

世が思いやられ恥ずかしさに耐えられず死んでしまったのだろう。男は考えが足りなかったのだ。明かさずに面倒をみてやればよかったのに」と明言し、しみじみと哀れを誘う。女が鄙の琵琶湖の波の荒々しい音におびえると、男は、それは近江の湖の波の音だが「逢ふ身」の二人が別れ別れでは生きているかいがないと歌を詠んで泣く。下人とは違う京出身の女の美しさがたびたび言われるのだが、鄙に住む使用人となったこの女は都人らしい「みやび」さで描かれる。また、男はぎりぎりまで女と別れなかったものの他の女の婿になると手紙すらよこさなくなるのだが、いざ女と再会するとしみじみと愛情深い歌を詠む。説話ではあるが、都人らしい「みやび」な男女の話となっている。この『今昔物語集』における「身ノ宿世思ヒ被遣(やられ)て、恥(はづ)カシサニ否(えた)不堪(へ)デ」という語り手の評言が、『伊勢物語』六二段で「いとはづかし」と思う女が返歌もできず男の言動に絶望して行方不明になった理由であるとも考えられる。

そこで改めて六〇段と六二段の男女をそれぞれ比べてみると、六〇段の男は宇佐の使という高貴な身分であり優美な歌を詠みかけるが、六二段の男は女の零落した姿に純粋に驚嘆しているのか、または、ひたすら蔑んでいるのか、二首の歌は結果として女を追いつめている。山本登朗氏によると、この二首の歌には女の現状に対する憐憫の情が込められ、衣を脱いで与えた男のふるまいからそれは明白である[15]という。甚だしく身分格差のある都の男の当然のふるまいなのかもしれない。しかし、いくら驚いたとしても女の容貌や様子の衰えをこのように率直に詠むのはいかがなものかとも思われ、哀れんで与えた衣を女が喜んで手に取るとは思われない。六〇段の女は誠実に愛してくれる地方官の妻となったものの、優美な貴人の秀歌を聞いて昔の夫だと思い出し我が身を恥じて出家する。六二段の女は人の甘言にのって地方に下ったものの捨てられたのか給仕女となり、男の歌に我が身を恥じて逃げ行方知れずになってしまう。彼らの言動を見る限り、六〇段の男女の方がより優雅であるようにも思われるが、女が「はづかし」と思う内容、すなわち、女の恥として描かれていることについては共通点がある。まず疎遠な男の愛情を信じて待つことができなかったこと、次に鄙（地方）に下ったこと、その結果男の妻でいた時よりも零落していること、そして男の贈歌に返歌ができないことである。河添房江氏は、「女が詠歌を放擲した、というよりそれを許されておらず、したがって歌による男へのいかなる反駁も、また当然のように心的連帯の回路もとざされ」、「歌による『みやび』の連帯を拒絶された空間として鄙」が設定されている[16]という。そんな女たちの末路は出家か行方知れずであり、六二段の女は語り手から「賢明ではなかったのだろう」と明確に非難されている。『伊勢物語』では、女が「心かしこく」ある在り方として、都でひたすら男の愛情を信じて待ち、当意即妙な歌を返す女性像を賛美しているようにも思われる。それは、「みやび」を体現する在り方にもつながり、それをよしとする美意識が描かれているとも言えよう。三木紀人(すみと)氏は、恥の感覚を共有することで相手との関係が成り立ち、その感覚とは「自分が何もので、どのようにふるまえば自分らしくあり、また相手に納得されるかということへの、倫理や美意識にねざす判断力・想像力」である[17]という。

つまり、これら「はづかし」に表れた恥の感覚は、「みやび」という美意識に反することだけでなく、男女の長期にわたる恋愛関係における暗黙のルールとして「美意識の基底にあって確固たる

規範性[18]」をもつものである。そして、『伊勢物語』においては、都の男は「みやび」な言動を貫き通す男性であり、鄙の女は信頼するに足らず思慮が浅く返歌もできない女性であるという、都高鄙低の美意識や倫理観が明確に描かれていると言える。また、物語の機能的一面としても、片桐洋一氏が言うように、主人公（男）は「みやび」の完成者・体現者としての絶対的な地位を与えられることで物語の舞台回しをつとめ、鄙に住む女は「みやび」とは縁遠いつまらない女として描かれることで享受する女性たちに教育的役割を果たしている[19]ということが言えるのであろう。しかし、女の絶望や悲観は、朱買臣の妻とはまた違った切実さでもって享受する女性たちの心情に迫りくるものであったに違いないと考える。

四　その他の段の「つらし」「くるし」について

(1) 男女の「つらし」

4　むかし、男、はつかなりける女のもとに、

　あふことは玉の緒ばかりおもほえてつらき心の長く見ゆらむ（『伊勢物語』三〇段　一四二～一四三頁）

5　むかし、男、伊勢の国なりける女、またえあはで、となりの国へいくとて、いみじう恨みければ、女、

　大淀の松はつらくもあらなくにうらみてのみもかへる浪かな（『伊勢物語』七二段　一七六頁）

6　むかし、男、「伊勢の国に率ていきてあらむ」といひければ、女、

　大淀の浜に生ふてふみるからに心はなぎぬかたらはねども

といひて、ましてつれなかりければ、男、

　袖ぬれてあまの刈りほすわたつうみのみるをあふにてやまむとやする

女、

　岩間より生ふるみるめしつれなくはしほ干（ひ）しほ満ちかひもありなむ

また、男、

　なみだにぞぬれつつしぼる世の人のつらき心は袖のしづくか

世にあふことかたき女になむ。（『伊勢物語』七五段　一七七～一七八頁）

7　むかし、男ありけり。いかがありけむ、その男すまずなりにけり。のちに男ありけれど、子ある仲なりければ、こまかにこそあらねど、時々ものいひおこせけり。女がたに、絵かく人なりければ、かきにやれりけるを、今の男のものすとて、ひと日ふつかおこせざりけり。かの男、いとつらく、「おのが聞ゆることをば、いままでたまはねば、ことわりと思へど、なほ人をば恨みつべきものになむありける」とて、ろうじてよみてやりける。時は秋になむありける。

　秋の夜は春日わするるものなれやかすみにきりや千重（ちへ）まさるらむ

となむよめりける。女、返し、

　千々の秋一つの春にむかはめや紅葉も花もともにこそ散れ（『伊勢物語』九四段　一九五～

一九六頁）

4の歌では男が薄情な女を恨み、5の歌では伊勢の女が男に対して自身を松にたとえ私も待ったのだからあなたの薄情を恨まないと言い、6の歌では男が薄情な女を苦しく思い、7の地の文では男が子までなした仲なのに薄情な女の行動を苦しく思うと言う。これらの男女の関係は、男の事情（「音もせず」「またえあはで、となりの国へいく」「その男すまず」）や女の事情（「はつかなりける女」「世にあふことかたき女」）により今まさに立ち消えようとしている。

そのような男女の関係性の中で、特に相手の薄情を恨む歌に詠まれた「つらし」に着目してみると、三〇段では男が玉の緒のような短い逢瀬と女と逢えない長い時間を対比させて女の薄情を恨む歌を詠む。七五段では男の恋情の訴えを巧みにそらす女に対して「縁語」（「なみだ」「ぬれ」「しぼる」「袖」「しづく」）を散りばめて男は全身全霊で女の薄情を恨む歌を詠む。これら「つらし」を詠んだ歌はどれも掛詞や縁語、比喩等技巧に優れたものであり、詠み手の真情がよく分かる歌である。

また、男女の贈答に着目すると、七五段では伊勢の国に誘う男に、女は「みる」（海松と見る）、見るだけで十分だと冷淡であり、男が更に「みる」だけで終わりにするのかと訴えると、女は「みる」だけでも「かひ」（貝と効（かひ））があると応え、男は女の薄情を恨む。九四段では新しい男を迎えた女に、男が皮肉交じりに新しい男を「秋の夜」「きり」、自身を「春日」「かすみ」にたとえて詠むと、女は「秋」は「春」にはかなわないと元の男のすばらしさを言いながら「紅葉」も「花」もともに散り男はどれも頼りにならないという歌を詠む。これらの男女の歌も掛詞や縁語、序詞、比喩等技巧を駆使したものである。この中でも特に、七五段の男の歌には、技巧が優れているだけではない、相手にきっと真情が伝わるであろうと思われる熱情が感じられる。

その他、男女のいる場所に着目すると、七二段では伊勢の女と「となりの国」（尾張国か）へ行こうとする男、七五段では伊勢の国に誘う男と京の女であり、その物理的距離感も男女の関係が途絶えてしまう要因となっていそうである。

つまり、「つらし」は相手の薄情を恨む常套語であるが、それが詠み込まれた歌には相手への熱情があふれているがゆえに、より絶望感が際立つ言葉であるとも言える。

(2) 男女の「くるし」「心ぐるし」

8　むかし、男ありけり。馬のはなむけせむとて、人を待ちけるに、来ざりければ、

いまぞしるくるしきものと人待たむ里をば離（か）れずとふべかりけり（『伊勢物語』四八段　一五五頁）

9　むかし、男、身はいやしくて、いとになき人を思ひかけたりけり。すこし頼みぬべきさまにやありけむ、ふして思ひ、おきて思ひ、思ひわびてよめる。

あふなあふな思ひなすべしなぞへなくたかきいやしき苦しかりけり

むかしもかかることは、世のことわりにやありけむ。（『伊勢物語』九三段　一九五頁）

10　むかし、女はらから二人ありけり。一人はいやしき男のまづしき、一人はあてなる男もたりけり。いやしき男もたる、十二月（しはす）のつごもりに、うへのきぬを洗ひて、手づから張りけり。心ざしはいたしけれど、さるいやしきわざも習はざりければ、うへのきぬの肩を張り破（や）りてけり。

せむ方もなくて、ただ泣きに泣きけり。これをかのあてなる男聞きて、いと心ぐるしかりければ、いと清らなる緑衫（ろうさう）のうへのきぬを見いでてやるとて、

むらさきの色こき時はめもはるに野なる草木ぞわかれざりける

武蔵野の心なるべし。（『伊勢物語』四一段　一四九～一五〇頁）

11　むかし、男ありけり。女をとかくいふこと月日経にけり。岩木にしあらねば、心苦しとや思ひけむ、やうやうあはれと思ひけり。（『伊勢物語』九六段　一九七頁）

8 では男が旅立つ男を待つ辛さを、9 では身分の低い男が高貴な女に対して身分差のある恋の辛さをそれぞれ「くるし」と表現している。特に、四八段では待つ身の女の辛さまでが歌に詠まれ、九三段では貴賤の間の恋の苦しさを「世のことわり」と語り手が評している。

また、10 では身分の高い男が身分の低い夫をもつ妻（義姉妹）への同情を、11 では女が長い間言い寄る男への同情をそれぞれ「心苦し」と地の文で説明している。特に、四一段では「女はらから」「むらさき」というと初段を連想させるが、慣れない衣張りをして衣を破り嘆くだけの妻のことを聞いた高貴な男が自身の妻の姉妹であるという縁ゆえに緑色の袍を歌とともに贈り、それを語り手は「武蔵野の心」であると評している。新編日本文学全集頭注によると、「武蔵野の心」とは『古今和歌集』巻第十七雑歌上にある次の読み人知らずの歌の意を示す。

867　紫のひともとゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る（『古今和歌集』巻第十七雑歌上　三二九頁）

この歌は本来紫草への愛着を歌ったものであったようだが、愛する人の関係者すべてに親しみを感じると後に解釈されるようになった。この歌の次には業平の歌がある。

妻（め）のおとうとを持て侍りける人に、袍（うへのきぬ）をおくるとてよみてやりける

なりひらの朝臣

868　紫の色濃きときは目もはるに野なる草木ぞわかれざりける

前の歌を踏まえて武蔵野の草を詠みながら、妻への愛情を通して妻の妹の夫である義弟への好意を詠んだものである。『古今和歌集』では「袍」は業平から義弟への直接の贈り物であるが、『伊勢物語』四一段では貧しい義姉妹の苦労を際立たせた上での男から義姉妹への贈り物となっている。

『伊勢物語』における「くるし」は、手紙や歌の中で、愛人の秘匿や相手を待つ身、貴賤の恋それぞれの堪え難い苦しみ、絶望が表されている。特に、貴賤の恋の苦しさは物語の中で世間の道理として認識されているようである。これらを見ると、特定の一人への情熱的な恋や身分相応の恋をよしとする倫理観が描かれていると考える。

一方、「心苦し」はどちらも地の文であるが、男の長い時間をかけた恋情の訴えに心が動かされ「あはれ」とまで思うようになる女の心や、貧しい義姉妹を不憫に思う高貴な男の心が表され、愛情や憐憫の情に至る心の動き、つまり、人情の機微が表現されている。これらは、人の言動に素直に反応する心の動きをよしとする美意識が描かれているとも言える。

以上をまとめると、『伊勢物語』の「つらし」「くるし」には相手の状況を踏まえた上での堪え難い思い、絶望感が表されている。相手の状況とは何かというと、男の歌では「はつかなりける女（三〇

段)」、「伊勢の国に率ていきてあらむ」という男（七五段)、「その男すまず（九四段)」、「男、身はいやしくて、いとになき人（九三段)」、女の歌では「武蔵なる男、京なる女（一三段)」、「伊勢の国なりける女」と「となりの国へいく」男（七二段）というように、都と鄙の遠距離等男女それぞれの事情であったり身分格差であったり、自力では解決できずどうにもしようがない状況である。そうだからこそ不安定で狂おしく揺れ動く心を「つらし」「くるし」と言って相手に訴えかけている。歌を詠んだ後のことは書かれていないことが多いので分からないが、訴えかけたとしても悲劇的な結末になるようにも思われる。

五　『大和物語』『平中物語』それぞれの「おそろし」「おそる」「はづかし」について

『伊勢物語』では斎宮や後の二条の后、天皇の愛人、親王の愛人等との禁忌の恋が描かれるが、絶望的状況を作り出し歌の力で打破するという機能はある[19]ものの、登場人物の畏怖はあまり描かれていない。禁忌という倫理観を逆手にとったかのように歌で熱情が描かれ、登場人物の倫理的認識には触れられていないのである。そこで、他の歌物語には出てくる「おそろし」「おそる」という心情を抱く主体とその対象、その内容を考察し、それらに表れた倫理観を明らかにした上で、『伊勢物語』の表現の独自性を明らかにしていく。

12　ある旅人、この塚のもとに宿りたりけるに、人のいさかひする音のしければ、「あやし」と思ひて、見せけれど、「さることもなし」といひければ、「あやし」と思ふ思ふねぶりたるに、血にまみれたる男、前に来てひざまづきて、「われ、かたきにせめられて、わびにてはべり。御(み)はかし、しばしかしたまはらむ。ねたき者のむくひしはべらむ」といふに、「おそろし」と思へどかしてけり。さめて、「夢にやあらむ」と思へど、太刀はまことにとらせてやりてけり。(『大和物語』一四七段　三七三～三七四頁)

13　大和の国なりける人のむすめ、いと清らにてありけるを、京より来たりける男のかいまみて見けるに、いとをかしげなりければ、盗みてかき抱(いだ)きて馬にうちのせて逃げていにけり。いとあさましうおそろしう思ひけり。日暮れて、龍田山に宿りぬ。草のなかにあふりをときしきて、女を抱きてふせり。女、おそろしと思ふことかぎりなし。わびしと思ひて、男のものいへど、いらへもせで泣きければ、(『大和物語』一五四段　三八八頁)

14　この男いぬれば、ただひとり物も食はで山中にゐたれば、かぎりなくわびしかりけり。かかるほどにはらみにけり。この男、物もとめにいでにけるままに、三四日来ざりければ、待ちわびて立ちいでて、山の井にいきて影を見れば、わがありしかたちにもあらず、あやしきやうになりにけり。鏡もなければ、顔のなりたらむやうも知らでありけるに、にはかに見れば、いとおそろしげなりけるを、いとはづかしと思ひけり。(『大和物語』一五五段　三八九～三九〇頁)

15　亭子(ていじ)の帝、石山につねにまうでたまひけり。国の司(つかさ)、「民疲れ、国ほろびぬべし」となむわぶると聞(きこ)しめして、こと国国の御床(みさう)などにおほせごとたまひければ、もてはこびて、御まうけをつかうまつりて、まうでたまひけり。近江(あふみ)の守(かみ)、「いかに聞しめしたるにかあらむ」と、嘆

きおそれて、また、「むげにさてすぐしたてまつりてむや」とて、かへらせたまふ打出(うちいで)の浜に、世のつねならずめでたき仮屋(かりや)どもを作りて、菊の花のおもしろきを植ゑて御まうけをつかうまつれりけり。国の守も、おぢおそれて、ほかにかくれをりて、ただ黒主(くろぬし)をなむすゑおきたりける。（『大和物語』一七二段　四一六～四一七頁）

16　君がため衣(ころも)のすそをぬらしつつ春の野にいでてつめる若菜ぞ

男、これを見るに、いとあはれにおぼえてひき寄せて食ふ。女、わりなうはづかしと思ひてふしたり。（『大和物語』一七三段　四二〇頁）

17　おなじ男の、心のうちにつつむこと、はたにげなうありければ、かかる嘆きになむあるともえいはで、ただ気色になむ見せける。女、いとあさましと思ひよる気色を、男見てぞ、かの人いと近くて使ふ人に語らひつきて、「なほ、いとよきをりに奉れ」とて、よろづの思ふことを書きてあるを、この女見て、思ひのぼれる心を持たりけるが、めさましう、おそろしうもあるかなとは思ひつれど、おぼろけにと聞きて、いはんやはとおもひ苦しがりて、「いかに思ひてかかることは」などぞ返りことはしたりける。（『平中物語』三段　四六〇～四六一頁）

他の歌物語における「おそろし」等の用例は、12 ～ 16 の『大和物語』では「おそろし」三例、「おそろしげなり」一例、「おそる」二例の計六例あり、17 の『平中物語』では「おそろし」一例があるのみである。12 は摂津の国に住む女一人を男二人が奪い合い女が入水自殺をしてしまったという生田川伝説の後日譚で後人注と思われる箇所ではあるが、この「おそろし」は奪い合った男の一人の塚のあたりに宿った旅人が血まみれの男に対して太刀を貸すことへの恐怖を表している。その後男は旅人に、勝ったお礼と争いの経緯を話すのだが、朝になってみると誰もおらず塚に血が流れ太刀にも血がついていたという無気味な話である。13 は大和の国に住むたいそう美しい（「清らに」）女を京の男が盗み出す話であるが、最初の「おそろし」は女が男に馬に乗せられ盗み出されたことに対して驚きあきれた（「あさましう」）恐怖を表し、次の「おそろし」は女が草の中の敷物の上で男に抱かれて寝ることに対して心細さ（「わびし」）への恐怖を表す。行く末の不安に絶望した女は男に返歌をして死んでしまう。14 は入内予定の大納言の娘を盗み出した男が安積山の庵で長年暮らしていたという話で、この「おそろしげなり」は身ごもった女が山の井戸で久しぶりに見た自分の顔に対してその醜い様子への恐怖を表す。自身の容貌のみっともなさに気がひける（「はづかし」）と思った女は男への深い愛を歌に詠んで死んでしまい、女の死骸と歌を見た男も死んでしまう。15 の二つの「おそる」はどちらも複合動詞であり「嘆く」や「おづ」それぞれに畏怖を付け加えて恐縮の意味を更に強調しているように思われるが、近江の守が宇多天皇に対して天皇（の気遣い）への畏怖を表す。16 の「はづかし」は女が男に対して貧しくてご馳走ができない女の親が庭の菜を蒸物にして梅の枝を箸に花びらに歌を詠んで出したこと、それに同情した男が食べたことのみっともなさに気がひけることを表す。17 は身分違いの恋の話であるが、この「おそろし」は、高貴な女が男に対して恋文をよこすのは大それたことだという思いを表す。

これらを見ると、『大和物語』の「おそろし」「おそろしげなり」には、死後も女をめぐって争う男の愛執の無気味さや盗み出された女の生活や容貌それぞれに対する死んでしまうほどの絶望が見

られ、「おそる」には天皇への畏怖が表されている。また、「はづかし」には女が自身の容貌や貧しさそれぞれをみっともなく思うという認識が具体的に表されている。一方、『平中物語』の「おそろし」には、身分違いの恋を禁忌とする認識が分かる。以上を踏まえると、他の歌物語においては、天皇の権威は絶対であること、執着は仏教的罪障であること、身分違いの恋は禁忌であることというような倫理観が描かれていると言える。また、「清ら」であることや経済的に豊かであることをよしとする美意識も見られる。

一方、『伊勢物語』では、帝の愛人との恋（六五段）や身分違いの恋（九三段）において、現実的な結末を予測して「身も亡びなむ」と女が言ったり、身分の低い男の「苦し」さは「世のことわり」であると語り手が評したりすることを通して禁忌は決して破ってはならないという倫理観は感じられる。しかし、この他にも禁忌の恋は数多く描かれる（［斎宮］六九段・七三段・一〇二段・一〇四段、［後の二条の后］三段・四段・五段・六段・七六段、［親王の愛人］一〇三段等）ものの、各登場人物の恐れおののくような心情よりも恋の熱情の方に力点が置かれて描かれている。また、『伊勢物語』における「はづかし」という語の底流には鄙人の都人に対する劣等意識がある。『伊勢物語』においても天皇の権威や禁忌、「みやび」をよしとする等の倫理観はあるのだがこれらを踏まえた上で、「おそろし」という語は一切使われず、各登場人物の「はづかし」「つらし」「くるし」等の語から歌の熱情へとつながっていくという表現がなされている。これらを踏まえると、天皇の権威や禁忌への畏怖ということよりも、男女の関係性の中での絶望や悲観を表す「はづかし」「つらし」「くるし」からそれぞれの歌で熱情が吐露されるという表現を選んでいる所に、『伊勢物語』の表現の独自性があるのではないかと考える。

六　おわりに

『伊勢物語』の心情、絶望や悲観を表す語に着目して、そこに表れた倫理観を考察する。

「はづかし」に表れた恥の感覚は、「みやび」という美意識に反することだけでなく、男女の長期にわたる恋愛関係における暗黙のルールとして規範性をもつものである。また、「つらし」は相手の薄情を恨む語であるが、それが詠み込まれた歌には相手への熱情があふれている。それに加えて、「くるし」には、愛人の秘匿や相手を待つ身、貴賤の恋という自分ではどうすることもできない耐え難い苦しみが表されている。

これらの心情、絶望や悲観に見られる倫理観とは、美意識である「みやび」とも関連して、都で相手を信じて待ち続ける態度や相手への誠実な言動という持続的な男女関係における恋愛のルールであるとも言える。また、貴賤の恋を明確に否定する倫理観も見られる。これらの倫理観を土台として「歌の力と人の心への信頼[19]」を理想としているのが、『伊勢物語』という歌物語であると考える。

＊『伊勢物語』『古今和歌集』『今昔物語集』本文はそれぞれ新編日本文学全集による。

＊『古今六帖』本文は宮内庁書陵部編『図書寮叢刊　古今和歌六帖・上巻・本文篇』（養徳社 1967 年）、『校證古今歌六帖（上）（下）』石塚龍麿稿　田林義信編（有精堂　1984 年）による。

＊『漢書』本文は『和刻本正史　漢書（影印本）（二）』（684 ～ 685 頁　汲古書院　1973 年）、現代語訳はちくま学芸文庫『漢書 5　列伝Ⅱ』小竹武夫訳　厳朱吾丘主父徐厳終王賈伝第三四上班固（筑摩書房　1998 年）による。

注

1　古屋明子「『古事記』に表れた畏怖と倫理観」古代中世文学論考刊行会編『古代中世文学論考第 44 集』新典社　2021 年

2　古屋明子「『日本書紀』に表れた畏怖・恐怖と倫理観」大東文化大学日本文学会「日本文学研究　第 61 号」2022 年 2 月

3　古屋明子「『竹取物語』に表れた恐怖と倫理観」大東文化大学日本文学会「日本文学研究　第 62 号」2023 年 2 月

4　田口栄一「伊勢物語の絵画化」別冊国文学 34「竹取物語伊勢物語必携」鈴木日出男編　1988 年 5 月

5　鈴木宏子　吉野瑞穂「伊勢物語類歌索引」別冊国文学 34「竹取物語伊勢物語必携」鈴木日出男編　1988 年 5 月

6　　ふみたかへ　　よるかのないし

332　さためなくあまたにかくるむさしあふみ　いかにのれはかふみはたかふる（『古今和歌六帖』上巻本文篇第五雑思ふみたかへ　220 頁）

　　ふみたかへ　　よるかのないし

さためなくあまたにかくるむさしおふみいかにのれはかふみはたかふる（『校證古今歌六帖（下）』第五上巻雑思ふみたかへ　154 頁）

7　島内景二「古註釈の世界」別冊国文学 34「竹取物語伊勢物語必携」鈴木日出男編　1988 年 5 月

8　片桐洋一『伊勢物語の研究〔資料篇〕』明治書院　1969 年

9　『伊勢物語』の「みやび」について、片桐洋一氏は「宮廷風」「王朝風」「俗塵、すなわち宮廷の官僚としての生活から超越し、自由に時をすごし、美しいものは美しいとして追求する、いわば『精神的自由』と言ったもの」（「伊勢物語根本―その虚構と方法」紫式部学会編『源氏物語とその周辺』武蔵野書院 1971 年）、渡辺実氏は「場面と状況に応じて、成人貴族としての自覚のもとに、最も洗練された言語・行動をとること」（新潮日本古典集成『伊勢物語』解説 1976 年）、秋山虔氏は「それ自体としてはいかに激しかろうとも個の内部に属するほかない恋情が、その一途の激しさからの要求として、かえって伝統的な約定に従って組みあげられる言葉である歌の形に転位されることで確固たる公共的風儀に鋳変えられ、相手との共感の道のひらかれる機微」（「みやび」『王朝語辞典』東京大学出版会 2000 年）であると言う。

10　渡辺実　新潮古典集成『伊勢物語』十三段頭注　新潮社　1976 年

11　山本登朗「『東下り』の物語・その二――十三段その他をめぐって――」『伊勢物語論　文体・主題・享受』笠間書院　2001 年

12　森三樹三郎『「名」と「恥」の文化』講談社　2005 年

13　五月まつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする（『古今和歌集』夏・読人しらず）

伊勢　なりひらとこそ

712　さつきまつはなたちはなのかをかけは　むかしの人の袖のかそする（『古今和歌六帖』上巻本文篇第六木たち花　335 ～ 336 頁）

伊勢　なりひらとこそ

五月まつ花立はなのかをかけはむかしの人の袖の香そする

○古今夏題不知よみ人不知　伊勢物語　朗詠花橘伊勢　伊勢集又業平集になし　後撰夏題不知よみ人不知「夏のよに戀しき人のかをとめは立花そしるへなりける（『校證古今歌六帖（下）』第六下巻木たちはな　404 頁）

14　糸井久「『伊勢物語』六十段と『漢書』朱買臣伝」法政大学国文学会「日本文学誌要　69」2004 年 3 月

15　山本登朗「伊勢物語の悪女」『伊勢物語論　文体・主題・享受』笠間書院　2001 年

16　河添房江「伊勢物語を読む　7 鄙に下る」別冊国文学 34「竹取物語伊勢物語必携」鈴木日出男編　1988 年 5 月

17　三木紀人「はぢ」『王朝語辞典』秋山虔編　東京大学出版会　2000 年

18　秋山虔「みやび」『王朝語辞典』秋山虔編　東京大学出版会　2000 年

19　片桐洋一「伊勢物語根本―その虚構と方法」紫式部学会編『源氏物語とその周辺』武蔵野書院　1971 年

20　宮谷聡美「狩の使―歌物語の達成―」『歌物語史から見た伊勢物語』新典社　2022 年